
World × World

シクル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WorldxWorld

【Nコード】

N0506BA

【作者名】

シクル

【あらすじ】

シクル四周年& amp ;なろう投稿十五作記念！

主人公、坂崎永久は消えた双子の妹、刹那と「コア」と呼ばれる存在の欠片を捜すためにいくつもの別の世界を旅することになる…。

「〜夢は現となりて〜」、「美味なる純血」、「落ちていた魔導書」、「ぐらとぐら」、「霊滅師」、「超会!」、「The Legend Of Red Stone」、「Floral Hearts」、「忘却のローズマリー」、「七式探偵七重家綱」……

これまでのシクル作品の世界を、坂崎永久が巡っていく……！

これらの作品を未読でもほぼ問題ないように出来てます、というか作ります。

Worldo・o「プロローグ」（前書き）

どうも、久しぶりの新作となりましたシクルです。

今作「WorldxWorld」はあらすじに書いてある通り、記念作品でございます。勿論あらすじに書いてある通り、これまでのシクル作品を知らなくても問題ないように作ります、なんでブラウザの戻るボタンはまだ押さないでどうかっ！

T L O R S（この間完結した拙作）程ではないかも知れませんが、それなりに長めのを想定して書いてますので、完結は年内にならない可能性も……？

m とまれ、これから永久達をよろしくお願いいたしますm（――）

Worldo・o「プロローグ」

枯れた大地だった。

草木の一本も生えていないその地面は、枯れ果ててひび割れている。ただただ荒野のみが広がるその場所に、生き物の姿は見受けられなかった。

ただ、二つの人影を除いて。

片方は、逆立った黒髪をもった長身の男だった。髪と同じくらいに黒い鎧を纏っており、その黒づくめの姿の中で、彼の赤い双眸は映えている。

黒い鎧の男の数メートル先の正面には、丈の長い白いドレスを身に纏った少女がいた。ゴテゴテとした動きにくそうなドレスではなく、装飾の少ない比較的動きやすそうなドレスで、ナイトドレスに近い。白いドレスとは対照的に少女の髪は黒く、その長さは剥き出しになっている背中を覆う程だった。

二人の間には、延々と沈黙が流れ続けていた。

両者口は開かず、ただ静かに互いを睨む。

一秒、二秒、三秒……静かに時間が過ぎていく中、不意に男が一步踏み出した　瞬間、少女の目の色が変わる。

男が少女へ向かって駆け出すのと、少女が男の方へ駆けるのはほぼ同時だった。

そして次の瞬間、枯れた大地へ金属音が染み込んでいく。

男の右腕は、どういうわけか剣のような形状へ変化しており、少女の右手にはいつの間にかショートソードが握られていた。

男と少女は、右腕と剣でしばらく鏝迫り合いをするが、やがて少女の方がバックステップで男から距離を取る。

と、その瞬間男は右腕を後ろへ振ると同時にその形状を変化させた。

「っ！」

男の右腕は、モーニングスターと呼ばれる武器へと形状を変えていた。

モーニングスターへと変化した右腕の先からは鎖が伸びており、その先には当然、凶悪な棘の付いた……男の頭一つ分程の大きさの鉄球が付いている。

男はその鉄球を少女へぶつけんとして、腰の回転と共に腕を容赦なく少女へと振った。

少女はすぐにショートソードに身を隠して鉄球を防ごうとするが、ショートソードのサイズでは明らかに鉄球を受け切れない。

しかし、ニヤリと男が笑みを浮かべた瞬間に、少女の持っているショートソードは身の丈程もある大剣へと姿を変えていた。

叩きつけられた鉄球は、大剣によって弾かれ、耳を劈くような金属音を上げながらボトリと地面へ落下する。

「……………っ！」

鉄球の衝撃による痺れに耐えつつ、少女は両手で大剣を持ち上げ、攻めに転じんとして男へと駆け出す。

両手で持っている大剣を千切るような動作で少女が両手を広げると、少女の手から大剣は消え、その代わりに少女の両手にはショーテルのような形状をした短い剣が一本ずつ握られていた。

「チィッ」

男が舌打ちすると同時に、男の右腕は最初に変化したのと同じ、剣のような形状へと戻る。

そんな男に対して、少女は異常なまでに俊敏な動きで二本の剣を操り、間髪入れずに様々な方向から男へと切り込むが、男はそれを右腕一本で受け続ける。しかし、防戦一方であることに変わりはない、男の表情にはやや焦りの色が現れていた。

不意に、男は空いていた左手の平を、少女へと向ける。

少女がそれに気が付き、しまったと言わんばかりに表情を歪めた時には既に遅く、少女の身体は後方へと吹き飛ばされていた。

男の左手からは衝撃波のようなものが発せられたらしく、少女の

腹部には激痛が走っていた。

地面へ背中から叩きつけられ、呻き声を上げながらも少女は素早く立ち上がったが、少女が視線を男へ戻した時、男は少女へと左手をかざしていた。

来る、と少女が判断すると同時に、男の左手から火球が発射される。

男の頭の倍程の大きさはあるその火球は、真っ直ぐに少女の元へと飛来していく。その火球に対して、少女は避けようとするどころか一步踏み込み　　右の剣を大きく火球へと振った。

次の瞬間には、火球が姿を消していた。

先程まで少女の左手に握られていた剣は消えており、その代わりに少女の右手には先程のショーテル型の剣ではなく、フランベルジエのような剣が握られていた。

便宜上、フランベルジエのよう、と形容せざるを得ないが、その形は通常のフランベルジエとは大きく異なっており、まるで燃え盛る炎のような形をした剣だった。

恨めしそうに少女の持つ剣を睨む男目掛けて、少女は再び駆け出す。

少女が男へと駆けていく途中で、少女の握っていた剣はまたしてもその形状を変化させていく。

次に少女が握っていたのは、東洋の剣　　刀だった。

素早く斬りかかる少女の刀を、男は咄嗟に右腕の剣で防ぐが

「　　ッッ！」

その剣は、刀によって両断される。

驚愕に表情を歪めつつ、左腕を剣状に変化させて少女へと突き出すが、既にそこに少女はいなかった。

男はしばらく、焦燥感に満ち満ちた様子で辺りを見回していたが、すぐに上空を見上げ　　言葉を失った。

その姿は、まるで天使だった。

ドレスから剥き出しになった背から、白く美しい両翼の生えたその少女の姿は、天使だとか、女神だとか言った表現がよく似合っている。

少女の右手にはショートソードが握られており、その切っ先を男へと向けて少女は急降下を始めていた。

男はすぐにそれを防ごうとするが、男が何か動作するよりも、少女のショートソードが男へ突き刺さる方が遥かに早かった。

ザクリと。音を立てて剣が突き刺さった。

World 0 - 1 「永久と刹那」

「好きです！ 付き合ってください！」

とある高校の屋上で、学ランをきた男子生徒がほぼ九十度なんじやないかと思える程に綺麗な角度でお辞儀をしていた。

そんな男子生徒の前では、二人の女子生徒が立っており、一人はキョトンとした表情を、もう一人は険しい表情を見せていた。

驚くことに並んでいる二人の女子生徒は、まるでドツペルゲンガ
ーか何かのようにソツクリなのだ。

背中を覆う程の長く艶やかな黒髪も、やや釣り上がった目も、背丈も、頭につけている白いカチューシャまでもが同じであり、女子制服であるやや古臭く感じる紺のセーラー服の、長い（膝下十センチくらいに見える）スカート丈まで全く同じだった。

キョトンとした表情をしている方は柔和そうな雰囲気だが、もう一人の険しい表情をした方はやや性格がキツめに見えなくもない。

「お願いします！ 僕と付き合ってください」

男子生徒が言い終わらない内に、キツめに見える方の女子生徒が口を開く。

「…………どっちと？」

冷えた声音でそう問うた女子生徒に、男子生徒は思わずえっ、と困惑の声を上げている。

「私とこの子、どっちと付き合いたいのかって聞いているの」

睨んでいるような視線を男子生徒に送るキツめな方の女子生徒の隣で、柔和そうな方の女子生徒は苦笑いしつつ様子を見守っていた。「じゃあ、どっちがどっちなのか貴方にわかれば、貴方の好きな方と付き合っても良いわ」

そう提案し、キツめな方は、制限時間は十秒ね、と言葉を付け足すやいなやカウントを始める。

「十、九、八、七、六、五…………」

「え、あの、えつと……」

二人を交互に指差しながら戸惑う男子生徒を見ながら、嗜虐的な笑みを浮かべるキツめな方。その様子を、柔和な方は先程と同じく苦笑いを浮かべたまま見守っていた。

「四、三、二、一……」

「わ、わかりません……」

カウントが終わると同時に、意気消沈、といった様子でうなだれる男子生徒に、キツめな方は吐きかけるように小さく嘆息する。

「そう。じゃあ、さよなら」

そう言っただけでひらひらと手を振ると、キツめな方は男子生徒の方へ目もくれずにその場を去って行く。その後ろを、柔和な方は男子生徒にごめんね、と小さく声をかけた後で慌ててついて行った。

「ちょっと……かわいいそうじゃない？」

屋上を出、下の階への階段を降りていく途中、柔和な方がキツめな方へそう言っていると、キツめな方は別に、と短く答えた。

「ほら、折角勇気出して告白してるんだし、あんなことしなくても……ね？」

控えめに言う柔和な方へ、キツめな方は呆れ気味に溜め息を吐いた。

「ホントにお人好しね……永久とわ」

永久、と呼ばれた柔和な方の女子生徒はキツめな方の言葉に、刹那つなもね、と小さく笑みを浮かべて答えた。

「ちゃんとどっちがどっちなのかわかって付き合っただけでいいのは、私のことを考えてのことだよな？ ほら、刹那だってお人好しー」

茶化した様子でそんなことを言う永久に、刹那、と呼ばれたキツめな方の女子生徒は途端に頬を赤らめる。

「ち、違うわよっ……私は単に、どっちがどっちなのかもわかんない」

いまま告白しちゃうような軽薄な男の相手を……する気がなかっただけよ」

「プイとすねたように永久から視線を外す刹那に、永久はへらへらとした笑顔を浮かべた。

坂崎永久さかざきとわと坂崎刹那さかざきせつなは、瓜二つな双子だった。

この学校で二年の坂崎姉妹と言えば間違いなくこの二人のことで、この気持ち悪いくらいにそっくりな双子は数ヶ月前に転向してきた生徒で、異常に仲が良いことや、二人共いわゆる「美少女」であることから瞬く間に学校中で話題になった。

その容姿故、先程の男子生徒のように告白をしにくく生徒が後を絶たないが、大抵は刹那によって玉碎されている。

ちなみに姉が永久で妹が刹那だが、未だに完全に見分けることが出来た者はいない。

「ただいまー」

学校を終え、自宅である坂崎神社へ戻り、社務所の玄関の扉を永久が開けると、すぐに奥から「どっちだ？」と初老の男性のものと、思しき声が返ってくる。

「永久でーす」

履いていたローファーを脱ぎつつ永久がそう答えると、奥の方から着流し姿の初老の男性が顔を出した。

「もう……いい加減覚えてよー」

冗談めかした風に言う永久に、男はすまんすまん、と後ろ頭をポリポリとかきながら頭を下げる。

彼の名は坂崎十郎さかざきじゅうろうで、この坂崎神社の神主の弟である。ちなみに神主は十郎の兄である坂崎孝明さかざきたかあきで、坂崎姉妹は「養子」ということになっている。

「しかしな……同じ顔、同じ声、同じ髪型の人間の見分けがつくか

……？ 髪型くらい変えたらどうだ？」

十郎の言葉に、永久はしばらく考えるような表情を見せ、自分の長い黒髪を指先でつついたが、やがてどうでも良さそうに考えとくと答えた。

「ん、そういえば刹那はどうした？ 一緒じゃないのか？」

「あ、そういえばどこ行っただら……？ 途中まで一緒だったんだけどどっか行っちゃったから、先に帰っちゃったんだと思ってた……」

「何故見失う」

「さー？」

首を傾げておどける永久に、十郎はやや呆れ気味に嘆息した。

「ボーっと考え事してたら……ね？」

「ね、じゃないね、じゃ」

こびりついた違和感が、拭えない。

まるでカビのように胸の内にこびりついた違和感が、ひっかいてもひっかいても剥がれない。気持ち悪い。

記憶がない。この神社に住むようになってから記憶の一切が存在しない。

気が付けばここにいて、いつの間にかここに住むようになっていて、平凡な女子高生の一人として高校に通っていて……。

おかしい。

坂崎刹那という名前すら、本当に自分の名前なのか確信が持てない。

おかしい。

スッポリと抜けている記憶が何なのか、まるでわからない。

おかしい。

違和感が気持ち悪くて仕方がない。

同じ境遇なのに、そんなことは毛ほども気にしていないかのよう
に振る舞う姉の永久（永久が姉、ということになってはいるが実際は
よくわからない）は更に気持ちが悪い。何故違和感を覚えないのか、
仮に永久の中にも同じものがあるとしても、何故あんなにへらへら
としていられるのか。

刹那には、理解出来なかった。

「……………」

下校中、社務所へ一緒に向かう永久がボンヤリとしていたのでそ
っと離れて本殿の方へ向かってみたところ、永久はボーっとしたま
ま気づかずに社務所へそのまま向かって行った。そんな間の抜けた
永久の様子に呆れながらも、刹那は本殿の方へと向かった。

別段、本殿に用があつたわけではない。

ただ、少し一人になりたかつただけだった。

あまり人気のない神社の中を、あまり意味もなくうろろろする。
見慣れた景色ではあるが、やはり昔からココにいたようには感じな
い。

刹那や永久の記憶について、孝明や十郎は何も言わないし、永久
も聞こうとはしていない。刹那は何度か聞いてみたことがあったの
だが、上手いことはぐらかされて結局詳しいことは何も聞けずじま
いだった。

「……………帰る」

本殿の裏辺りまできたところで、刹那が社務所に帰ろうとした時
だった。

「アレは…………？」

本殿の裏に、見たことのない祠を見つけた。

「こんな所に……………どうして？」

祠は開け放たれており、周囲の状況から察するにこの辺りにはし
ばらく誰も近づいていない様子だった。

そっと、何気なく祠に触れる。

「　　っ！」

電流が、刹那の中を流れた気がした。

「ん……んう……んあっ!？」

変な声を上げつつ永久が勢いよく身体を起こすと、既に日は落ちていた。

「え、えっと……」

学校から帰り、しばらくいなくなっていた刹那が帰ってきてからのことを反芻し、自分がいつの間にか眠りこけていたことに気が付く。髪に覆われている耳にはイヤホンがついており、その先に繋がっている小型の音楽プレイヤーは、プレイリストを再生し終わっているらし、自動的に電源が切れていた。

「あちゃー……」

電気もついていない自室の中、永久は制服姿のまま机に突っ伏して眠っていたようだ。

「誰か起こしてくれても良いのになあ……」

そんなことをぼやきつつ、イヤホンを外してプレイヤーごとポケットに突っ込むと、永久はゆっくりと立ち上がる。

どうにも、家の中の様子が変だ。

誰も起こしてくれないことにしたってそうだし、何故か家の中から人の気配を感じない。

不可解に感じつつ、家中を回ってみたが、十郎はおるか刹那もいない。それに、家の中の電気は全て消えていた。

「おっかしいなあ……」

一人呟く。

どこかに出かけている、というのもあまり考えられない。出かけるなら出かけるで、メールや書き置きの一つでもしてくれるハズだ。永久が今回のように家に帰ってからうたた寝してしまうのは、別に珍しいことじゃない。永久が寝ている間に全員が家を留守にするようなことがあれば必ず書置きやメールが残されていた。

誰もいない上に電気がついていないせいか、酷く心細い。

玄関を確認すると、刹那の靴がなかった。

もしかすると、他の皆は出かけていて、刹那は暇つぶしに外をうろろろしているのかも知れない。そう考えると、先程から募っていた不安が少しだけ晴れた気がした。

玄関から出て、特に誰も見つからなかった。社務所付近には誰もいないようなので、永久はすぐに本殿へと向かった。

「うっ！」

本殿に入った途端、形容し難い異様な感覚を覚えた。

感じたことがないハズなのに、どこか懐かしい感覚。

気持ちが悪い。

素直にそう思ったハズなのに、妙な懐かしさのせいか、少しだけその感覚に浸りたいと想着てしまう。それが余計に気持ち悪かった。ズシリと。胸の中で垂れ下がる違和感。

ずっと押し込めていたものが、急に垂れ下がってくる。

「うっ……っ」

気分の悪さが頭痛を伴い始めた。

見える世界が、どこか歪んでいるように見えるのは、この原因不明の気持ち悪さのせいなのか、それとも本当に歪んでいるのか……永久には、判断出来ない。

ただ、景色が所々陽炎のように歪んで見えているのだけは確かだった。

「何……これ……」

思わず永久が呟いたのと、本殿の裏の方で物音がしたのはほとんど同時だった。

「誰か、いるの……？」

問いかけるが、答えはない。

気分の悪さと歪む視界もあいまって、永久はしばらく本殿の裏へ行くことを躊躇していたが、やがて意を決したように本殿の裏へと走って行く。

「誰」

角を曲がった瞬間、ピチャリと永久の頬に赤が飛び散った。

「あら、永久……」

恍惚とした表情でこちらを振り返ったのは、自分と全く同じ顔だった。

「刹……那……」

茫然と佇む永久に、刹那は幸福そうな笑みを浮かべて見せる。その手にはどういうわけか西洋風の剣が握られており、永久が前にプレイしたゲームで「ショートソード」と名前がつけられていたものとよく似ていた。

「見て、これ……」

永久の方へ身体を向け、刹那はゆっくりと両手を広げた。

その足元では、四、五人程の人間が倒れていた。

まだ殺されたばかりなのか、生暖かそうな血をだらだらと流しながら、一目で即死だと判断出来るような傷を負った死体達。その見覚えのある顔に、永久は戦慄した。

「お父さん……十郎さん……」

倒れていた人間の内二人は、坂崎孝明と坂崎十郎だった。

他の人間も、永久の見たことのある人間ばかりで、どれも坂崎神社で働いていた人達の顔だった。しかし、誰一人として生きているようには見えない。

これが、死ぬということ。

どうしてか、初めて経験したことではないような気がした。

「どうして……こんなこと……」

ペロリと。ショートソードに付いた赤い血を刹那はなめると、永久に対して爽やかとさえ言えるような笑顔を向けた。

「私、思い出したの」

「え……？」

唐突な刹那の言葉に、永久は戸惑いの声を上げた。

「私は……思い出したわ。貴女は何も思い出さないの……？」

「何言ってるのかわかんないよ……刹那！」

「同じ、『私』なのに」

クスリと嘲笑うかのような笑みを永久にこぼし、刹那は左手で髪をかき上げた。

「私達はアンリミテッドクイーン……コアによって生まれた無限の存在」

意味が分からない。

永久には、刹那の言っていることの意味がほんの少しもわからない。

それを察してか察せずか、刹那は言葉をそのまま続けた。

「一つになるのよ。私達は……元々そうであったように」

「わかんないよ……刹那……どうしてっ……！」

泣き出しそうになるのを必死にこらえ、永久はむせぶようにして刹那へ叫ぶが、刹那は冷笑を浮かべるだけだった。

「貴女が……拒むなら……」

ほんの一瞬だけ、寂しげな表情を見せたが、刹那の表情はすぐに先程までの冷笑に切り替わる。

「えっ、あ……」

静かに突きつけられた切っ先は、止まることなく身体を貫いた。

Worldo - 2 「閉じるは日常、開くは門」

鼓動の止まる、音がした。

どくん、と。最後の鼓動。

冷たい金属の刃を伝って、最後の鼓動^{ドレ}が伝わってきたような気がして、少女は 刹那は切なげに目を細めた。

赤が足元に広がっていき、目の前で自分と同じ顔をした少女が開いた瞳孔でジッとこちらを見ている。

まるで、自分を殺したかのよう。

倒錯的なその光景に、刹那は自嘲気味に笑みをこぼした。

ゆっくりと剣を、ショートソードを少女から……永久から引き抜いた。支えを失った永久の身体は、呆気なくその場へ仰向けに倒れていく。

「さよなら」

小さく呟いて、刹那はショートソードを振り上げると、自分の長い黒髪を左手でまとめ ショートソードで切り裂いた。背中を覆う程に長かった黒髪が宙を舞い、はらりと儚げに落ちていく。

そんな様子を横目に見つつ、刹那は首を覆う程度までに短くなった髪を左手でかきあげた。

妙な感覚だった。

まるで、自分の身体が分解されていくかのような感覚。末端から

身体感覚が曖昧になっていき、頭の中までもがボンヤリとしていく。

そして身体全体の感覚が曖昧になってしばらくすると、徐々に身体感覚が……今度は芯から戻っていく。

身体を一度分解されて、再構成されているかのような錯覚を覚えた。

「ん……」

小さく呻き、ピクリと指を動かして身体が動くことを確認する。寝起きのようなけだるさがあったが、ゆっくりと身体を起こした。

「ここ……は……？」

右も左もコンクリートの壁で、自分が先程まで倒れていた場所もどうやらコンクリートらしい。左右の壁は平坦だが、地面は少し凹凸があつて道路のようだ。

周囲は薄暗かったが、夜であるように感じなかった。日の光を、建物の屋根に遮られているかのような薄暗さだ。

「路地裏……？」

直感的に、そう感じた。

「目が覚めたのね」

不意に、女性の声が聞こえた。

妖艶な印象を受ける声質で、正確な年齢は判断しにくい。「少女の声」ではない、とだけはハッキリと判断出来た。

声のした方へ視線を向けると、そこには黒い女性が立っていた。地面につく程長い黒のワンピースを身に着けており、腕にはレースのあしらわれた黒い手袋をはめている。黒く長い髪はポニーテールにしてあるが、おろせば地面についてしまうんじゃないかと思える程に長く、洗うのもまとめるのも面倒だろうな、などと現状とはあまり関係ないことをボンヤリと考えてしまう。

「ここは、世界と世界を繋ぐ境界」

そう言つて女性は怪しげに微笑み、そのまま言葉を続けた。

「いらつしゃい、坂崎永久」

「^{ひやまきやうじ} 松山鏡子。そう名乗った目の前の女は、妖艶な動作で自分の長い髪をなでた。」

彼女からは怪しげな雰囲気が漂っており、その所作一つ一つが妖艶に見えてしまう。

彼女のいる場所は、この「路地裏」の行き止まりの場所で、壁を背にして鏡子は静かに永久を見つめている。後ろを振り返ると、どこに続いているのかわからない暗闇があり、何があるのか確かめてみようなどという気は一切起きなかった。

「向こうには行かない方が良いわ。その先は『不安定』だから」「不安定……？」

「一つの『世界』として確立していない空間よ。グチャグチャになりたくなければ、行かない方が良いわ……」

グチャグチャ、というのが果たしてどのような状態を指すのかはわからなかったが、行かない方が良いことだけは確かだった。

「それで……貴女は……？」

「名前は……さつき名乗ったわね。私はこの境界の ^{ゲート} 門の管理を任されている者よ」

平然と、鏡子は突飛なことを口にした。

無論、それを永久がすぐに理解することなど不可能で、最初に永久の頭の中に浮かんでは疑問符だった。

「境界……？ ^{ゲート} 門……？」

わけがわからない、と言った様子で問う永久に、鏡子は小さく嘆息して見せた。

「事態が呑み込めないのもわかるわ。だけど貴女は、呑み込まなくちゃいけない」

いえ、と言葉を付け足して、鏡子は言葉を続ける。

「これから呑み込まれる、と言った方が正しいかしら？」

何に？ と問おうとした口を、永久はすぐに閉じる。鏡子は既に、

何かを言おうとして口を開きかけていたからだ。

「貴女達のことは、悪いけどずっとここから監視させてもらっていたわ」

「貴女達……？」

問うて、すぐにそれが自分と刹那のことだと理解する。と同時に、これまでのことが一気に脳裏を流れて行く。

倒れている人達。

飛び散った血。

笑みを浮かべる刹那。

突き刺さる 剣。

「っ！」

咄嗟に永久は、ショートソードの「刺さっていた」胸部に触れた。そこに痛みはなく、傷痕さえ存在しない。貫かれていたハズなのに、来ている紺色のセーラー服にも痕は存在しなかった。

そのことに関して永久が声を上げるよりも、鏡子が口を開く方が早く、またしても永久は言葉を飲み込んだ。

「封印が解けてからの数年間……アンリミテッドとしての記憶を失い、二つに分かれた貴女達を、私はずっと監視していたわ」

「二つに……分かれた？」

「一つになるのよ。私達は……元々そうであったように。」

刹那の言葉が、永久の脳裏を過る。

「アンリミテッドって……何なんですか……？」

「……無限」

永久の問いに、鏡子は少しだけ間を開けた後、ゆっくりとそう答えた。

「アンリミテッド限り無き者……コアと呼ばれるエネルギー結晶によって生まれた存在」

コアによって生まれた無限の存在。

コア。確かに刹那も、そう言っていた。

「私も、アンリミテッドに関する詳しいことはよくわかっていない

のだけど、この境界を任された時に『アンリミテッドは危険』ということは知らされたわ」

特に……と付け足すと同時に、鏡子の視線が永久を射抜く。

「封印が解けていた、貴女達二人は」

「私と刹那が……アンリミテッド……？」

そんなハズはない、と言いかけて、永久は唇を結んだ。

あの時の刹那も、そして死んでいるハズなのに今生きている自身も「アンリミテッドである」と仮定しでもしない限り説明がつかない。アンリミテッドが具体的になんのかはよくわからないが「無限」の名を冠するからには、そう簡単には死なないのだろう。だから自分は生きている、そう仮定するでしか、今は納得出来ない。

夢なんじゃないかとも思った。夢であって欲しいと。

しかしこれはどうしようもないくらいに現実で、感じているものが全てが夢のようにボンヤリなどしておらず、ハッキリと、クッキリと、感じていた。脳が、理解していた。

現実だと。

「貴女と彼女……刹那は、元々一つの存在アンリミテッドだった……。だけど、封印の影響が貴女達のコアは二つに分かれて、バラバラに復活したのよ」

それを聞いて、だからソックリなのか、とどうでも良さそうなことを納得してしまう。

「偶然記憶を取り戻した刹那は、貴女を殺せばコアの半分が自分の元へ戻ると思ったのでしょね……だから貴女は、一度殺された」

「私の中の……コア……？」

そつと胸に手をあてるが、そこにコアだと言ったものがあるのかどうかなどは到底わかるハズもなかった。

「ただ貴女の中のコアは、刹那の中に戻るどころかバラバラに砕けて散っていったわ」

「砕け散ったって……どこに……？」

「世界よ」

世界？ と問う永久に、鏡子はコクリと頷くと言葉を続けた。

「記憶が戻ったばかりで、力を制御し切れていなかった刹那は、無意識の内に漏れ出した力で空間を歪めていたの。そのせいで世界と世界の境界が曖昧になって、コアは砕け散った時に別々の世界へと飛び散ってしまってしまったのよ」

あの時、永久が本殿へ向かう際に感じた視界の違和感。まるで陽炎のように視界が歪んでいたのは、どうやら気分のせいではないらしい。

本当に、歪んでいたのだ。

世界が一つではない。永久のこれまでの常識を覆すような事実だったが、何故か永久は驚く素振りを見せなかった。

悟った、わけでもないようだが。

「貴女の中に残っているのはほんの欠片だけ。刹那は恐らく、それにはまだ気づいていないわ。あの時貴女の中にあつたコアは、全て砕け散つたと思ひ込んでいるハズよ」

「その欠片を失えば私は……消える……？」

永久の言葉に、鏡子は静かに頷く。

死ぬ、ではなく、消える。直感的に永久はそう理解していた。

「貴女は今、その欠片によって辛うじて生きている……。その欠片の力で再生した貴女を、この世界に私が連れて来たのには勿論理由があるわ」

息を吐き、鏡子は語を継ぐ。

「貴女には、砕け散つたコアの欠片探しをして欲しいの。砕けたコアの欠片は、それだけで力を持つわ。それを手にした他の世界の人間がどうなるか……薄らと想像は出来るわね？」

具体的にはよくわからない。だが、力を得た人間がどんな行動を起こすのか。それを想像するのはさほど難しいことでもなかった。

刹那の顔が、ちらつく。

「それに、今の貴女は欠片によって生きてはいるけど、その小さな欠片だけじゃ、いずれ身体を維持出来なくなって貴女は消滅してし

まっわ」

その言葉に、永久は何も答ええない。何か考え込むような表情を見せたまま、ずっと鏡子の方を見つめている。

「コアという他世界からの干渉は、確実にその世界の均衡を崩す。境界の管理者として、それを見過ごすことは出来ないのだけど、私はこの境界から出ることが許されない。だから」

「私に、頼むんだね」

鏡子の言葉を続けるようにしてそう言った永久に、鏡子は首肯する。

「ここは世界の境界。私は、貴女が欠片を探す手伝いをする事が出来るわ……。静かに消滅を待つのか、それとも自分と世界のために欠片を探す旅に出るのか」

そう言った後、鏡子は「既に刹那は世界を渡って欠片を探す旅に出ている」と説明した。どうやら記憶を取り戻した刹那は、鏡子の力を借りずとも自分の力で別の世界へ移動することが出来るらしい……アンリミテッドとしての、力で。

「わかんないよ」

不意にそう言って、永久は首を左右に振った。

「何もわかんない。何でこんなことになってるのか、何で私と刹那がアンリミテッドっていう存在なのか、そもそもコアって何なのか
刹那が、そのアンリミテッドに戻って何をしようとしているのか」

永久の言葉に、鏡子は切なげに目を伏せた。

「でもね、考えたとこでわかんないものはわかんないし、ヒントも少ないから考えれば考える程わけわかんなくなっちゃう」

これまで日常の中にいた永久には、到底理解出来るハズがなかった。別の世界など、境界など、アンリミテッドなど、コアなど……。まるでアニメや漫画の中のような出来事の連続を、理解出来るハズがないのだ。

「鏡子さんの話を聞いてる内に、少しだけその『アンリミテッド』」

のことが思い出したような気がするけど、ボンヤリしててよくわかんない。鏡子さんの話に、あんまり驚く気にはならなかったけどね。でも、やっぱりわかんない」

そう言っつて、永久はおどけるようにして肩をすくめて見せる。

「だから私は、動くよ」

スツと。まっすぐな瞳が、鏡子に向けられた。

「消えたくなんてないし、刹那のことも見つけなきゃいけない」

決意を固めた、曇りのない瞳。それを昔、どこかで見たような気がして、鏡子は少しだけ口元を緩めた。

「そう、なら協力は惜しまないわ」

鏡子がそう言ったのと、鏡子の隣の空間に大きな裂け目が出現したのはほぼ同時だった。

「ここをくぐれば、コアの欠片を探す最初の旅が始まるわ。どうする？」

ニヤリと笑みを浮かべて問うてくる鏡子に、永久は勿論、と答えて裂け目へと視線を向けた。

「行きます」

私を、刹那を探しに。

後戻りは出来ない。否、しない。

裂け目の先に見える景色　一面の砂漠へ、永久は一步踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0506ba/>

World x World

2012年1月6日16時40分発行